

オーバーロード
"Mondo Diverso
Alla Tomba";

ごむまりさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしゲーム終了までギルメンが円満で揃っていたなら、もし転移したのはモモンガ様だけでないなら……そんなありふれたもしもで構成された、ぬるぬるなぬるま湯のお話です。

以上あらすじ。

以下は注意等。

色々と捏造・妄想も多くなります。特にギルメン各員の性格等々がもはやオリキヤラ。

解釈の都合で変な捉え方もしてたりするかも？

プロットは流れで断ち切るもの。

基本は一人称、他は神様が見てる。

ちよろつとした小ネタ。

不定期に無理なくのんびり上げます。

モモンガニウムが最初以降不足します。お読みの表階層担当守護者、守護者統轄殿は

医師の診断を受けてからご覧ください。

0	0	0	0
3	2	1	0
T	M	M	A
&	&		
P	P		
61	39	17	1

目次

「楽しかった……ああ、そうだ。楽しかったんだ」

十数年続いた歩みもついには止まる。終わりを迎える事となったユグドラシルの最終日、モモンガは思いの丈を吐き出すようにその内心を溢した。

仲間達と造り上げた玉座の間。その最奥に位置する凝りに凝った意匠を施した玉座に座し、彼は感慨に耽っていた。

輝かしい栄光の日々。未知を求めての探索。大人ながらにはしやいだ対人戦。思い起こせば途切れる事もなくかつての光景が浮かぶ様であった。

「や、なぐにを一人でセンチってるのかな、このお骨さんは」

——のであったが、ものの数秒も経たぬ内に軽い雰囲気漂う声が彼の思考を止めさせる。自然と閉じていた視界を開けば、モモンガの顔を覗くように見詰める鳥獣人ハービィの姿が

そこにはあった。

「……全く。人が折角雰囲気を出している所を邪魔しないで下さいよ、レインさん」

モモンガは軽く肩を上げる素振りを見せながら、嘆息エモートで己が思いを表した。

尤もそれを受けたレインは意に介さず、ニヤリと笑いながら——笑顔エモートの内、俗に悪笑顔と呼ばれるものを出し——パタパタと翼をはためかせて、広大な空間を誇る玉座の間を飛び上がった。

バカと煙はなんとやら。そのようにモモンガが思ったかはともかく、彼女は一頻りの高さまで飛び上がるとそこから見事な急降下を披露した。

すわ衝突かと思われたが彼女は鋭角なターンを行い、モモンガよりも少し高い位置でピタリと停止する。片翼をビシッと突き付けもう片翼のみで羽ばたく姿は少し滑稽に見えるのだが、それは本人の知るところではない。

更に言えば飛び上がった意味もないと言えるが、それは^{飛行バカ}レインだからの一言で済ませられるので割愛とする。

「はいはい、世界系よろしく唐突なトリップは控えるよーに。白骨標本は回顧すると中々重いネタが飛び出すのが通りなんです」

「いや、意味分かりませんって。なんですか世界系って。世界級^{ワールド}アイテムの類似品ですかね？」

「もー、このユグドラシル脳のネズミ目リス科リス亜科モモンガ族さんは、本当にもう。大昔のサブカルチャーをご存知？ ということなんですー。ま、そんなことよりもぼやぼやしているせいでアレ、忘れないで下さいよ?」

そう言い残し、レインは玉座に座るモモンガの前から広間へと身を翻した。

彼女を追ったモモンガの視線は雑多に集う四十人の人影——その殆どが異形の姿を象っており、見た目がヒトな者は僅かばかり——を捉えた。

多様な者がこの場には居たが、その外見に反して和氣藹々と談笑しているようである。

そしてこの光景を眺めるモモンガの視線は、どこか物悲しい色を纏っている。先程消えかけた言い知れぬ感情が、再び彼の胸中を駆け巡っている様であった。

「モモンガさーん! そろそろ始めますので、号令をお願いします」

そんな折、植物の蔓が絡み合つて人形ひとがたを象つた異形が声を張り上げる。

これ幸いと感慨に耽つていたモモンガは思いを振り払い、片手を挙げて応えようと次なる事の為に立ち上がった。

喉の調子を確かめるように首元に触れ、わざとらしい咳払いをする。内心では会席での部長や遠い記憶である校長の姿を思い描き、今日の為に何日も考えていた言葉を口にした。

「えー、おほん。本日はユグドラシル終了に際し、今まで大変お世話になり、大恩ある運営様に感謝の言葉と共に贈り物を届けるべく——」

「ちよつとモモンガお兄ちゃん、骨みたいに堅すぎだよー!? カチカチなのは下だけ、ね？」

そんなガチガチに固まった、まるで中学生が大人ぶったかのような主張のモモンガの言葉は、やけに愛くるしい声に似合わぬ台詞によつて止められた。

「いや、オヤジみたいな寒い下ネタ飛ばすなよ……むしろ姉貴がそこら辺貞淑堅たれくしろよ」
「黙れ弟。……へッ、高校の頃に私の声で盛つてた癖して」

「あ、えっ!? 何言つてんだよ!! っーか、あの時は姉貴だと知らなかったんだよ! というか、何言わせてんだよ!!」

「何つてナニだよ。不出来な弟の為、最後に印象付くような話をしてあげたんだから、感謝しろ」

「せめて話す内容を選べよおおお!! 脳内ピンクのふとつ「あ、あ、ん?」……なんでもないっす」

「宜しい————モモンガお兄ちゃん、お話を遮つてごめんね! 不肖の弟には後で言つておくから、お話続けて?」

彼が苦言を呈した瞬間からこの結末は決まっていた様である。一瞬間こえたドスの

効いた声で言い争いは終幕した。

そして姉は特勝者に何事も無かったかのように、柔らかく可愛いげのある声で謝罪を口にする。

対して弟は敗者ぶつぶつと呟きながら項垂れている。「俺の黒歴史……」と嗚咽が漏れるようなその様に、幾人かが近寄り肩を叩いて慰めた。

尤も、「今さらそれぐらいでお前の印象は変わらないから」という意味が込められていた事など、彼は知る由もないが。更に一部では「あつたんだ……黒歴史」と心底驚かされていた様であると加えておく。

その一方で話の腰を折られたモモンガは、彼の数日間の努力が水泡に帰した事を嘆くでもなく、逆にそれを楽しみつつも笑顔エモートで宣言した。

「フ、フフツ……最終日でもお二人は相変わらな様ですね。全く、折角考えた内容が台無しです……まあ、この方がらしくはありますけど。それじゃあ時間も押してきましたし、悪役ロールらしい最後を飾ってやりましょうか!」

彼の宣言に応える様に集まった面々は雄叫びを上げる。その声を皮切りにより一層の喧騒を増した異形達は、着々と行動を開始した。

「おー!」「待ってましたー!」

「何を使おうかな」エフェクト「効果演出強化のアイテム使う?」

「全力戦闘をだいたい五分だけ？」「マジ？ 超位魔法準備しとくか」

歓迎の声を上げて真面目に備える者達。準備に余念は無く、演出にも力を入れていた。

「よし、今日の為に新調した【正義降臨】を魅せる時が来たな！」

「おい正義馬鹿、見せるならもつと離れてやれ。被つて眩しいんだよ！」

先走る正義に巻き込まれる悪。本日は一段と神々しい四文字が見れそうである。

「実はこつそりAIに手を加えまして。時間になるとここにNPCが大集合するんですよ〜」

「おお〜奇遇だねえ。実はゴーレム達も集まる様にしてて……ガルガンチュアが入れば怪獣大決戦なのになあ〜」

同じ事を試みた黒い勤労者に悪戯クラフター。一時的な人口密度が増える事は想像に難くない。幸いにして容量以上の物は省かれたらしい。

「ねえ、これってどうやって使うのかな？」

「いくら脳き——行動派だからといって、アイテムの使い方ぐらいは……って、ああ、それですか。一先ずアイテム使用後に出てくるウインドウから——」

教えを問う武道派教師に解説する名軍師。別段、知識意欲がある訳でも無く、単純に判り辛い仕様からの問い掛けである。

名誉の為に、彼女は決して頭が残念な類でない事を此所に明記しておく。

「なあ姉ちゃん。俺こいつ初めて使うんだけど大丈夫だよな？」

「……私に聞くな愚弟。フレンドリーファイアは切れてないし大丈夫でしょ。部屋とかはヤバイかな？」

慣れない物に戸惑う弟に若干の困惑を滲ませる姉。なんだかんだで面倒見は良いと評判がある——ギルメン情報より——彼女は、あしらう様に見せてその実は考えている様であった。

しかし、今回ばかりは結果が見えない不安が拭えない様であるが。

「うううもう五分も無い！ これからあこちゃんと触れ合えないかと思うと……うううううううう」

「やーうん。またメールするから、ちよつと離れて姉姉さん。私の画面に警告窓来てるからね？ もう押しちゃってもいいかなーって、冗談だから！ うぞうぞはやめろおー！！」

「いやー、この風景も見納めと思うと物悲しいですね。思うままに第六階層の夜空を撮り納めしちやいましたよ」

「おおつと奇遇だね。私も手掛けた魂わたくし達を見納めに行ったんだ」

「おや、それは良いですね。後で皆にも配りますか」

「おお！ それは名案です。終了後にも楽しみが出来ました」

「ハツハツハツハツ」

「ちよつ！ 自然バカとメイドバカ そのバカ二人！ 見ザルしてないで助——」

もふもふ好きに捕まり掛ける鳥に、それを背景に和やかに話す趣味を通し続けた者達。思い出の土産は大層メモリを食いそうであった。

そしてハラスメント行為に厳しいユグドラシルでも、同性では多少緩くなる弊害が此所に。クリオネのお食事シーンと表現した自然愛好家は実を射ていた。

こうして各々が準備を進め欲望に動く者が居る中。集団から抜け出し、玉座の前に立つモモンガに並ぶ者が一人。

「モモンガさん」

「ああ、タブラさん。準備は終わりましたか？」

「ええ、それはもうどぎつい配色の花火を見せて差し上げますよ」

「あはは。私達の目がやられちゃいそうですねー」

表面上は互いに表情すら動かないゲームアバターだが、その笑い声は心底穏やかに聞こえた。

「モモンガさん、どうもありがとうございます」

そんな折、脈絡なくペこりと腰を折って礼を示すタブラ。蛍光色な緑や紫を想像して無駄にチカチカさせていたモモンガは、困惑する様に動きを止めた。

「ええつと。なんのお礼でしょうか？」

「確かに唐突過ぎましたかね。勿論、ギルド長としてギルメン皆を纏めてくれた御礼です」

「いや、そんな大したことでは——」

「あるんですよ。そもそも私みたいな変わり者が長く居ついている事が証拠みたいなものですから」

苦い事を思い出したのか、タコのように見える頭を搔いて「色々とやらかしましたしねえ」と苦笑エモートを掲げる彼は続けた。

尤も彼の思う事とギルメンが思う事がイコールとは断言出来ない。その面でも随一の変わり者と言えた。

「ニグレドを創った時とかは覚えてます？」

「勿論ですよ。あの時はギミック回りで話を付けるのが大変でしたよね。思った以上に注ぎ込んでましたっけ？」

「ええ、まあ……あの時は私自身、天啓を得たりとばかりに暴走しちゃってましたし。何かと衝突しそうだったのを上手く宥めて止めてくれたのはモモンガさんですからね。」

後、追加リソースの枠を雰囲気作りに充てた事もありますか」

「まとめる事が私の役目でもありますから、当然ですよ！ リソース分は自腹を切ってくれましたしね。落とし所は簡単でしたよ？ それに出来上がったものは素晴らしかったですし……いや、私は全然ビビってませんでしたけど」

「実はあの時の映像データとかあるんですけど？ ログアウト後を楽しみにしておいて下さい。———ありがとうございます」

「またしても綺麗に頭を下げられ、普段の生活から『感謝』などされた事が少ないモモンガはわたたと分かりやすく慌てた。

尤もこの場合、その前の発言が影響している可能性もあると言えるが。

「いやいやいやつ、ええつとタブラさん？ そこまでして頂かなくてもですね……というか、そのデータは止めてくださいよ！」

「おや？ 私が渾身の気持ちを含めた謝意を受け取って貰えないのでしょうか？ 残念ですが既定の時間を過ぎれば送信する様に仕掛けてあります」

「いえいえつ！ そういう訳ではなくてですね、そもそも私は雑務ばかりで大それた事は一つも———いや、どこぞのダイニングメッセージですか!？」

「ああ、悲しいなあ……。モモンガさんは私程度の事、些末なものだと。雑務だと掃き捨ててしまわれるのか。正に悪の親玉の鑑ですね、血の通っていない骨の所業です。それ

は暗に私を排除するという脅しですかね？」

「つて、なんでそうなるんですかー!? ……というか、いい加減遊んでますよね？ もう、二重で疲れましたよ」

「あはは、バレましたかー。あつ、データの件は本当ですからね」

二人して朗らかに——骸骨はカタカタと、タコらしき者は触手をフルリと震わせ見た目は薄気味悪いが——笑い合った。

それからしばらくは他愛ない会話を挟み、二人して膨れ上がる様々な色合いの光を放つ広間を眺める。鼠王国式のパレードにも引けをとらないだろうその光景は、消え去る前の蠟燭が放つ、強くも儂い光を連想させた。

ちなみにデータは文字通り撮影者の手を離れ、崩れ落ちた骸骨が居た事を記しておく。

「残り二分少々で開始、といった所ですね。配置に着きますか」

「ええ。最後に楽しみましょう」

「勿論ですとも！ ……それとモモンガさん、ログアウトしたら必ずメールを見た方が良いでしょう」

他にも何かを送ったのだろうかと首を傾げるモモンガを残して、「それでは」と一声と疑問を残しタブラが喧騒の中へと戻って行った。

今も部屋の上空には、自らの尾をくわえ飲み込まんとするウロボロスの姿がある。その姿は威風堂々、流石は世界級ワールドクラスと言えなくもない。

——が、例え見てくれは良くても、アイテム使用者の視界には運営からの注意書きが映り込むのである。

知る者の少ない、密やかな萎えポイントであった。

「ウロボロスよ。我が願い——いや、我らがギルド。アインズ・ウール・ゴウンの悲願を叶えたまえ！」

別段初見では無かったモモンガは声を張り上げ——それこそお問い合わせ画面を掻き消すように——腕を横風ぎに振るった。

その動作を合図にしてか、彼の他集った四十人の異形達が異口同音に願いを告げる。

「「「クソ運営爆発しろ!!」」」

こうして願った声そのままに異形達は用意していた火花火花を打ち上げる。

ある者は超位魔法を、ある者は過度に装飾された魔法やスキルを。またある者は渡された世界級ワールドドアイテムを使いその効果に驚嘆し、そしてワールド正チャンピオン義が華美な四

文字を背負い宙を舞う。やたらと爆風に巻き込まれていた様に見えたのは偶然なのだろう。

炎が上がり風は舞い、氷に包まれ閃光が走る。気が付けば幾多のNPCが参戦し、守護に付くのみであったゴーレムまでもが集っていた。

ウロボロスを彼らが言うクソ運営に見立てた、プレゼント贈与が始まったのである。

無論、そのプレゼントは届かず、貴重な世界級アイテムを使ってまで何をしているのか。と、晒し挙げてにされても——既に全員が晒されているが——文句の言えない所業である。

当の本人達もそれぐらいは知っての事。只々、最後に馬鹿騒ぎをしたいと思い実行されたまでであった。

何時しか漏れ出た誰かの笑い声が切っ掛けとなり、玉座の間はナザリック史上初と言える程の熱気を見せる事となる。

当初の予定通りこの馬鹿騒ぎはユグドラシルのサーバー停止まで続けられた。彼のギルドは最後まで遊び通したのだ。

しかしある一点のみ、誰もが予想し得ない事が起きていた。それは願いを請われたウ

ロボロスが、文字通り爆発を起こしていた事。

原因はユグドラシル運営の遊び心にある。幾つかの願いは定型化され、それに応じた反応を行うようにプログラムしていた様であった。

例えば妹を願えば血の繋がらない妹が降り、誰も傷付かない世界を望めば全プレイヤーが一度に死ぬ——当然デスペナ付きで。焦ってq!!と願っても何も起こらないが、ギヤルのパンティーを願った場合はハラスメント違反のペナルティをくらう。

このような遊び心満載の試みは、しかしてプレイヤーにはついぞ知られる事はなかった。

只でさえ世界級ワールドというこのゲーム最上級のカテゴリに属する物であり、その効果は運営に自らの無茶を通せるという破格のアイテムである。お遊びで使うような酔狂な者は現れず、例えばそのような者が居るとしても取得に数ヶ月をも要すると言われた永劫ウツロホの蛇の腕輪スは、手を出すには敷居が高過ぎたのだ。

故に彼らは気付けない。耐性無視の轟音と目も眩む光を受けたせいで。

故に彼らは気付かない。その身がヒトでは無くなった事を。

故に彼らが気付いた時、そこはきつと見知らぬ場所であろう。

ユグドラシルのゲーム終了最終日。

こうして彼の悪名高いギルドメンバー及びその拠点是人知れず、本人達も知らぬ内にユグドラシルから離れていったのであった。

「ア痛タタ……すごい爆発でしたね、皆さん——つて、あれ？」

そしてこの場、ナザリックが誇る玉座の間に残った者は只一人のまとめ役だけだった。——そのおまけに今尚消えないウロボロスと、荒れに荒れた広間も付属して。

01 — M

一体全体何が起こった!?

何故匂いを感じる!? 何故口が開く!? 何故NPC達は、加えてゴーレムまでここに居るんだ!?

——違う、一旦落ち着こう。

そう『如何なる時も冷静に』それが基本でしたよね、ぷにつと萌えさん。

よし、まずはこの場所から整理していこう。

ここは……見間違えようも無いな。ナザリック地下大墳墓の最奥、玉座の間。その丁度広間の中央辺りだろうか。

次に今の時間は……視界のインターフェイスが消えているな。ええっと、アイテムボックスはどうすればいいんだ?

あー、割りと始めっから分からないじゃないかこれ。アイテムよ! とか言えば良いのだろうか?

「——恐れながら、モモンガ様」

内心でこんこんと悩んでいる内に、アルベドが——あれ？ さつきまで玉座の側に居たよな？——声を掛けてきた。

「というか、これも分からない事の内一つだよなあ。」

「あの蛇を駆除するのに些か時間が掛かっております。モモンガ様にはどうか、玉座に座して御待ち頂けないかと」

「なんでウロボロスが出たままなんだ!? それにうちのNPC達が喋ってるのは……良くないが一旦は置いておこう。なんでウロボロスに攻撃を仕掛けているんだ!? 全く意味が判らんぞ！」

『モモンガさん、如何なる時も冷静に』——ってこれは無理ですよ、ぷにと萌えさん！ もう『だいたいるし★ふぁーが悪い』説でなんとかしよう。だいたい悪いし。

「あー、うん。なんとなく気分がスツとした気がする。これからも悩んだらこれでもいい。」

「あの……モモンガ様？ 如何なされましたか？」

「おっと。そういうえばアルベドから、座したらどう？ みたいな事を言われていたっけ。しつかし、普通に話してるなあ……首をこてんと傾げる様はかなり自然体だ。もうこういうものだと思うしかないか。」

「しかし、その。こう、ね。アルベドさんや。」

とても距離が近いというか。しなを作っているせいで胸が強調されているというか。何か良い匂いもするというか。

「いや、アルベド。なんでもにやいで——なんでもないぞ」
囁んだ。

いや、こんな美人に寄せられた事なんてないから仕方ないって！ 誰だって絶対にこうなる。ギルメンの九割は自分と同じな筈だ。

あー、またなんかスツときた。なんなんだこれ？ 心が落ち着くというか、波が治まっていくというか。

うん。一先ずは言われた通り座ろう。これで距離も置ける筈だろうし。

うん。

素直に玉座に座ったまではない。未だにドンパチしている広間はちよつと不味いけどそれは次でいい。

「モモンガ様。どうやら先程から何か御悩みな御様子。不肖ながらこのアルベド、全力を持って御力添えさせて頂く所存です」

アルベド、近い。

いや、なんかもうそういうお店だっけナザリック。無理矢理連れられた一回だけだけ

ど、それよりもっと密着度高いなこれ。腕に当たってるから柔らかいから貴女も良い年頃なんだからもっとこう慎みをね。あー、良い匂いする。

——はい三回目。なんとなく掴めてきたな。

感情が昂ると落ち着くのか？　なんにせよ暴走しそうになくて助かるな。……情けない話だけど。

「あー、そうだな。アルベドよ、お前のアイテムボックスから何か出してみてくれないか？」

それと折角だし、本当に悩んでいる部分を聞いてみようか。少なくとも何か情報は増える筈だろうし。

というか、咄嗟にロール風味で話しちゃってるけど平気……だよな？　相手も何故か敬う感じだし。こんな時なのにロールプレイに興じてしまうとは、我ながら悪い癖だなあ。

「お前……長年連れ添った夫婦……くっ、くっ、くっ、くっ、くっ、くっ、くっ、くっ」

「アルベド？」

「——ハッ！　し、少々御待ち下さいませ！」

「焦らずとも良い。ゆっくりやってくれ」

あー、美人さんが慌てる所って良いなあ。しかし、どうやってアイテムボックスを開

くのかは、しつかり見ておかないと。

ふむ。服に手を掛けるか。

こう懐に手を入れると取り出せるような感じだろうか？ ……なんだか猫型の便利ロボットみたいだ。

ん？

んんんんん!!

ちよおつとアルベドさんや、どうして服を全て下ろそうとしている!?

「ちよまつ、ア、アルベド？ 何故服を脱いでいるんだ？」

「申し訳の無いことに、私のアイテムボックスには現在何も入っておりません。なので、今から装備している衣服を収納し差し出そうかと」

「いやいやいや、そこまで頼んでないから！ 全く親の顔を見て——ああ、そういえばタブラさんが張り切って設定書いていたっけ。」

と、すると色々変な行動も納得できるか。『るし★ふぁーも悪いけどアルベド関連はタブラも悪い』よし、これでいこう。俺の心の平穏を守るために犠牲になってくれ、二人とも。

「モモンガ様……その、こちらで宜しいでしょうか？」

いや、空想に逃げても逃げられないのは知ってた。見ないように下を向いていたけ

ど、受け取るなら前見ないとダメだよなあ、これ。

もちろん決して欲望に負けたわけでは無くて、これは情報を集めるために致し方ない犠牲なんだ。そう確かコラテラル・ダメージ？ という奴なんだ、きつと。

飲めない唾を飲み込んで声のした方に視界を向けた。

其処に在ったのは僅かな朱を頬に走らせ、少し困ったように不安げな表情でこちらを上目に見据えるアルベド。その身体には一糸も纏わず、上は片腕で、下は腰に生えた翼でその神秘を隠し通している。その全身は白く輝いて見え、その身に着けていた上質な服布切れよりも美しくあった。そして微かに震える手で差し出された服を受け取る——その瞬間、美の神を思わせるその身体がこちらへと倒れこんだ。

突如として埋まる視界。自らの前半分に感じる温もりと同時に感じる柔らかな感触。それは先程隠されていた神秘の一面であり、夜闇すら見通す程の高性能な眼窩はその全てを嘗ての海馬部分へと余すこと無く収めていた。ああ、これこそが我々が求めていたエデンの園かペロロンチーノさん。貴方の求めた道は此処にありま——「くふふ、モモンガ様と、くふつ、皆に見せ付ける様にしつぽりと……くふー！」——はっ!?

なんとか正気を取り戻した際、適当に念じるとアイテムボックスに繋がる空間が開く

と分かった。

使わないまでも羽織れる装備品を入れておいて助かった……。本当に。

現在はアルベドをちよっと下げさせた。色々危ういわあの娘。今だってなんか柱の陰からチラ見してくるし。妙に俺のツボをツイて来るのは誰かの入れ知恵か？

さてと、当初の思惑通りとまでは言えないが順調に消化出来ているな。順調に。

結局時間は——色々あったから分かっていただけ——とつくにサービス終了の時刻を過ぎていた。

そして先程のアレな出来事からハラスメント行為の警告も出ない。それ故に、ここはユグドラシルでは無いことが分かる。

……確かに分かったは良いんだけど、なんだかなあ。

そして次に自身の肉体の変化もある。アレだけあって全く反応もしていないし、見える手足は骨である。纏う服装も豪華なローブ、と完全にユグドラシルでのアバター、モンガの姿なようだ。

まあ、この身体？ に変わっての違いは追い追い、だな。心が落ち着く事とかは気にはなるが……正直今はあっちが不味い。というか、ヤバイ。

玉座の間は広大である。

百人乗っても大丈夫な物置を数個置いても余裕で大丈夫なうえ、棒高跳びの世界記録保持者が頑張つて十倍高く飛んでも頭をぶつけない。

要するにとても広い。さながら気分は小学校の体育館である。

そして、そこで練り広げられている大バトル。という名の魔法撃ちつばなし合戦。攻撃される対象のウロボロスは意に介さず無言を貫き、NPC達はこぞつて魔法やスキルをぶつばなししている。

……うん。どうやって止めたらいいんだろう。NPCに声を掛けるのは正直な所、なんか怖い。前例アルペドとかもある訳だもんなあ。

そういうえば何故ウロボロスはまだ消えていないんだ？ 確かにアイテムとして使った筈なんだが……もしかして、願い未履行で発動段階で待機しているとかか？

えーと、確か腕輪は無インフイニティ・シフアザツク限の背負い袋の方に入れてたつけ——お、あつたあつた。腕輪が消えていないのなら、予想はだいたい当たりだろうか？

ということは、適当に願えば消えてくれるのか？ いや、そもそも願ったところで本当に叶うのか？ どういった仕様になるんだ？

……ふむ。こうなると途端に何を願うかが重要になるな。恐らくはユグドラシルではない別の世界、はたまた何かのゲームにでも移った可能性がある訳で。今まで取得し

たスキルや魔法はなんとなく使い方も分かる。つまりはユグドラシルでの設定も反映されているのかも、いやされている筈だろう。

あまり変な事を口走りでもすれば、どうなるか判ったものじゃないな……これは結構悩むぞ。

いつもならこういう重要な事柄は、ギルメン皆で多数決を取っていたし。大体が建設的な意見を出すたつちさんとそれに対抗したウルベルトさんで分かれるんだよなあ。おまけに腐れゴーレム^ろクラム^し★^クラフター^{ふぁー}が引つ掻き回すわ、どこぞの鳥獣人^{ハイベリー}が敢えて第三派閥を作るわで……本当に纏めるのが大変だった。

はあ。

皆は一体どこに行ってしまったんだろうか。流石に俺だけがこの場に居る訳じゃないんだろうけど。

もし、判るなら——

「ギルメンの皆の居場所さえ判れば迎えに行くのになあ……」

『よかろう。お主のギルドメンバーがこの世界に居る場所を特定出来る様にしてやろう』

「……あつ」

なんとなしに呟いた後、思わず手の中を見れば未だに握り締めたままの腕輪がある。

さつきの眩きが願いとして受理された様だった。

せめてYES／NOの問い掛けが欲しい。流星はユーザーからクソアイテム呼ばわりされた世界級アイテムだ。運営様の御遺志を存分に引き継いでいるようである。

——いや、少し考え方を変えてみよう。

俺がここに居るように他の皆だって居るのかもしれないし、無意識な眩きからとはいえ最終的に探すことを考えれば、ベターな願いかもしれん。

……いやそれなら「皆をナザリックに戻してくれ」とでも願えば良かったらうけどさ。もう手遅れそうだしなあ。

厳かな声が消えると同時にその巨大な姿も掻き消え、手の中には腕輪の代わりに見慣れぬ円盤の形をした機械が残っていた。

これが居場所を特定出来るアイテムになるのか？ 見た感じは少し大きな、懐中時計型のリーダーみたいだけど。

「オール・アップ・レザル・マジックアイテム道具上位鑑定>……ふむ、こう見えるか。おお、こいつは中々使えそうだ」

ユグドラシルとは違い自らの脳に直接——恐らくこの身体には無いだろうが——そのアイテムの情報が刻まれた感覚がある。そして予想通りに魔法は問題なく使用出来た。

まあ、さつきまでやたらとドンパチしていたから、ある意味判り切ってはいたんだけ

ど。

ウロボロスが残した物……仮にギルメンレーダーとでも言おうか。これはアインズ・ウール・ゴウンのメンバーが居る位置を光点と音で知らせ、その位置までを方位と距離で表すという実にシンプルなものであった。

誰が居る、というまでは分からないようだが。案の定今は自分に反応して、ピコンピコンと中々煩い……あつ、音は消せるのか。ふむふむ、光点に名称を付けて区別する事も出来るな。

まあともかく、こいつは後でじっくり確認するかとアイテムボックスへと収納。さてと、今一度周囲の状況を確認する。

本音を言えば今すぐにもギルメンレーダーを頼りに探しに行きたい。先程見た限りでも光点は幾つか確認出来、更にその内幾つかは比較的に近いようであった。

しかし自身の周りでは、敵視していた者が突如として消え失せたせいか立ち尽くす者達^{NPC}が居る。彼ら彼女らの多くは———というか全員がこちらを伺うように見ているのである。

こんな視線が突き刺さる中で自分勝手に行動出来るほど、自分は楽観的でもマイペースでもないのだ。

「皆の者、^ぐ苦勞であった」

徐に立ち上がり、頑張ったNPC達を労う言葉を投げ掛ける。アルベドとの会話からしてもこちらを敬っていることは明白。ならば、それ相応の態度ロウルズレイで接する方が良くだろう。

「——あの蛇は去り我らが願いが成就した。当初こそ此方が有利であつたが、この地へと飛ばされ危うかつたのだ……。しかしながら、我が優秀な配下である諸君らの働きにより、危機は回避されたと言えよう。大義であつた」

どことなく暗い表情の多かつたNPC等も、自分の言葉を受けて幾分か和らいだ表情を見せたようだ。

しかし、十全とは言えなかつた。何故なら苦し気に口を開く者が居たからである。

「恐れながらモモンガ様。我々僕しもへ一同には、その御褒めの言葉を頂戴する資格が御座いません」

冷酷且つ残忍で知的的、悪魔である故に悪魔らしくあれ。

確かそんなコンセプトで創られた——ウルベルトさんがえらく豪語していた——であろうデミウルゴスが、常に浮かべていた微笑を引つ込めて、苦々しい表情をしている。しっかし、僕ねえ。そこまで卑下しなくても良いのになあ。

「ほう。それはまた何故だ？」

「我々はへ口へ口様より直接の指名を——勅命を受けておりました。へ口へ口様の御言

葉は難解であり、私の意識とはなりません。『指定の時刻に玉座の間へ集まり、現れた蛇を全力で打倒せよ』との事であられました。ですが我々のみでは力及ばず、あまつさえモモンガ様の御手を煩わせる始末。弁解の余地も御座いません」

要するに命令を遂行出来なくて悔いているのか？ もう少し気楽に考えてはくれないかなあ……。

しかし、デミウルゴスのお陰でようやく分かった。この大集合はヘロヘロさん絡みだったということか。ならば、あの物言わぬゴレム軍団はあいつだな。元の場所まで動けるんだらうなゴレム達は。見るからに停止中じゃないか。

「ふむ、デミウルゴスよ。私には解らぬな。諸君らはこの場に於いて万が一での対応に呼ばれ、その万が一が起こった現状で私の準備が整うまで持ちこたえた。……なんだ、言葉に起こせば何も問題等無いではないか。だろう？ デミウルゴス」

「——御配慮頂き有難う御座います。僕一同、心よりの感謝をモモンガ様に」
ふう。なんとか納得して貰えて良かった。ちよつと堅苦しすぎるといふか。重く捉えすぎと言うのか。

……少し話ただけでも分かるな。なんなんだこの忠誠度、軽くカンストしてるんじゃないか？

俺、中身は只のおっさんなんだけどなあ……。

あー、もう今更接し方を変えたりとかは……無理だろうな。高い忠誠心が裏返つて、もしも反乱されたら今の俺だけじゃ太刀打ち出来ないだろうし。

……まあ、この様子を見てればそれも心配無さそうではあるんだが。

それに相手が上位者を求めるなら、支配者ロールを演じるのも悪くない。

とりあえず、今後の方針だけ話してこの場はもう閉めよう。

さて、まずはどうするか。

最早何が起こるか分からないしな。ここは万全の体制を整えてから、皆を迎え入れるようにするのが懸命じゃないだろうか？

しかし、あまり時間を掛けるのも宜しくないだろう。辺鄙な地へと放り出され、明日をも分らない暮らしをしているかもしれない。

情報収集とギルメンの探索。この二つをいつそのこと同時に執り行えば……。いや、ナザリックの防衛も確認しないと。

——ああつ、判らん！

現時点だと未知の部分が多すぎるな。もういつそ外に出て確認してみるか？ この未知なる世界を探索……ん？ これって結構良いんじゃないか？

よし、そうと決まればこの場は解散して早速外に出てみよう。



ナザリツクの外周付近なう。

うん。きれいな景色だ。見慣れた沼地ではなく、草原が広がっている。

そういえば、「現状を伝える時は『なう』って言うのが様式美らしいですよ、お骨さん！」とかレインさんが言ってたっけ。

確かあの後も気に入ったのか使い続けて、「敵影発見なう」「忒いさん連れて直上なう」「敵後衛壊滅なう……あつ、忒いさんdeadなう」とか戦闘中でも挟んで来たよなあ。

で、一時期ギルメンの中でも流行り出すし。おまけに派生も作られる始末。『わずだっけ？』

なあ。あまりにも皆がなうなう言うから戦闘中は自重しましょう、って決定までしたよなあ。

うん。まあ、こんな状況なら過去を振り返りたくもなる。

チラリと後ろを窺えば、セバスとマーレ。加えて、そろそろと列を成してついて来るナザリック産の配下MOB——アルベドが言うには義仗兵——が目に入る。その数、およそ二〇〇。

いや多すぎないか!?

改めて見ても多いわ、これ。

それとなく数のことを指摘しても——

「なにぶん急な事でしたので、ナザリック・マスターガードはこの程度の用意しか出来ずに申し訳ありません。くっ、警備の見直しやナザリック全域の確認が無ければ私自身が申し出るというのに……!」

「モモンガ様、不足分には配下の魔将を御付け致しておりますので、御心配無く」

「モモンガ様! わた——わらわ配下の吸血鬼ヴァンパイアフレイドの花嫁ならば見目に不足はありません

筈。直ぐにでも用意致しんす」

「ナラバ、我が部下ノ親衛隊カラモ幾ツカ同行サセマシヨウ」

「はい、はい! あたしからはフェンをお付けしますね、モモンガ様!」

「あ、あのっ……ボクは直接モモンガ様に、っ、付いて行きますっ」

「[[[[[[?]]]]」

「——でしたら私も執事として、モモンガ様に待従致します」

「[[[[[!]]]]」

「そ、そうか。ではその様にせよ」

この始末である。わず。

とびきり笑顔のマーレと密やかに微笑むセバスが印象的だった。

他の守護者からの強い視線もなんのその。そんな様子の二人に急かされて、大群引き連れての行進をする羽目になった訳だ。

単なる興味本意からの行動なんだけどなあ……ここまでされると息が詰まりそうだ。

まあ、一旦は置いておこう。それよりも周囲を探る方が建設的だろうし。

「この中で一番探知に優れた者は誰か判るか？」

「え、えっと。この中ならお、お姉ちゃんのフェンが一番です」

「確かに探索範囲が一番でしょう。調べさせますか？」

「ナザリック周囲数kmの様子が知りたい。何か知的生命体が居れば教えてくれ」

「お、「仰せのままに」」

「そ、それじゃあフェンお願い」

風によってザアザアと揺れる草原に、日が暮れかけて見えた夕焼けの赤色。そこに一声鳴いて駆けるフェンの黒が混ざり、そして瞬く内に姿を消した。

しばらくすれば戻るだろうし、それまではぶらぶらしておくかな。

「あ、あのモモンガ様！」

「ん……どうかしたのかマーレよ？」

なんて考えていけばマーレから声を掛けられる。聞きたい事でもあったのだろうか？

「そ、その……モモンガ様以外の至高の方は、どちらへい、行かれたのでしょうか？」

思わずどきりと無い心臓が跳ねる。こつそりと探しに行こうと考えていた事が見透かされた？ ……いや、単にマーレも疑問があり心配であったのだろう。

少し考えれば判る事じゃないか。まだ子供のマーレが創造者に会えたいと思う事はなんら不思議でもない。茶釜さんも溺愛してたからなあ……親思う心にまさる親心という奴だろうか。

「それに関しては私の方で情報を精査次第、皆に伝えようと思っていたのだが……マーレ、それにセバス。お前達には一足早く伝えるところでしょう」

心なしが身構えて見える二人に見せ付けるように、先程仕舞ったギルメンレーダーを取り出した。

途端にピコンピコンと響く電子音。おっと、機能を切っておかないと……。

「モモンガ様、そちらの物は一体？」

「ああこれはだな、お前達も覚えてるだろうがあ蛇からもぎ取ったアイテムになる。簡単に言えばアインズ・ウール・ゴウンに所属しているメンバー専用の探知機の様なものだな。哀しい事に我がギルドの各員が、今何処に居て何をしているかは判らぬ。だが、これさえあれば少なくとも位置は把握出来る。迎えを寄越せる訳だ」

「そ、それならば、探せばまた御会い出来るのですね!」

「ああその通りだ。しかしナザリックを手薄にして出掛ける訳にもいかん。防衛態勢が整い次第、探索隊を編成して向かいたい所だな」

こうして俺が考えていた事を伝えた。反応は概ね良好で、二人とも「是非探索隊に」とお願いされる程であった。

そうだな、NPCにとってはギルメン皆が産みの親という訳で。忠誠はともかく、心配するのは至極当然の事だ。変に警戒心を抱いていた己の心を恥じる。彼ら彼女らはこんなにも俺達の事を思っているというのに。

……まあ、それでもちよつとアルベドはね。うん。

——オオン!

辺りに響く巨狼の遠吠え。何かを見付けたのかと尋ねようとすれば、血相を変えたマールがそこに居た。

「モ、モモンガ様！ フェンが何者かを発見したみたいです。ですがこの気配は……」
「おお……これは御迎への御用意をしなくては」

「？ お前達、一体どうしたと——」

相手の姿すら見えない状態の筈だがこの様子。疑問は尋ねる前に答え自体が赴く事で解消される。

「いつやあー、正に読み通りの結果じゃないですか！ 流石は我らが名軍師、ヘルメスさん並みに尊敬しますよ」

「一つ目から大当たりとは、私たちの運も一周回って巡って来たんでしようか？ とうか今更褒めても遅いですからね、賭け分はしっかり頂きますので」

あまりの驚きで言葉が出なかった。例の現象が何度も起こっていると云えば判りやすいだろうか。

空から降り立った二人の異形は、それこそ見慣れた体で近寄り目の前で止まった。

「やあやあモモンガさんお久し振りです。と言つてもモモンガさんにしてみれば、あまり時間が経つてないかもしれないかもしれませんが。ま、積もる話はナザリックに入ってしまったしよ。いや〜久々のホームだ」

「ちよつとタブラさん、挨拶も重要ですがはぐらかさうとしても無駄ですからね？ 高

原産の花の蜜ですからね、モモンガさんも証人ですよ。モモンガさん今は混乱している

でしようから、円卓の間辺りで話しませんか？ ……しかし、リアルナザリックが体感出来るとは、実に興味深い」

ここで漸く心が落ち着いたらしい。頭に浮かぶは様々な言葉に疑問。しかしそれら全てを飲み込んで、今はこれだけを言おうと思う。

「タブラさん、ぷにつと萌えさんお帰りなさい！ 円卓の間に早速行きますか？ それともナザリックを見て回りますか？ 実は私もこの状況になつてからまだ見てなくてですね、九階層とかは物凄く気になつてはいたんですけど、状況把握が先かと思つてましたから。あつ！ そうそう、見て判ると思ひますけどNPC達が自由意思で動いてるんですよ！ 凄いですよね！ そういえばタブラさんはアルペドに何かを吹き込んだりしました？ 彼女のせいで色々と、あー不味い事になりましたね。なのですみません、一発殴らせてくださいね。つて避けないで下さい！ こっちはもう少しで猛獣に食われる所だつたんですから！ あつ、飛んで逃げたつて無駄です、<飛行>。こちら伊達に飛行バカと付き合つて飛んでません。直ぐに捕まえてやりますよ！」

「あ、あのぷにつと萌え様？」

「ん？ ……ああ、マールでしたね。どうかしましたか？」

「ボク達はどうすれば宜しいでしょうか？」

「えーと……因みに後ろの大軍は何？ 戦争でもするつもりだったの？」

「あれらはモモンガ様の儀仗兵でございます、ぷにと萌え様」

「儀仗兵って……多すぎるでしょうに。とりあえず帰してくれて良いよ。私達は円卓の間に向かうと思うから。話が終わったらく伝言メッセージの連絡は……セバスにするから」

「ハッ！ 畏まりました。急ぎ御帰還を祝う宴の準備も致しますので。お帰りなさいませ、ぷにと萌え様」

「お、お帰りなさいませ。ぷにと萌え様！」

「宴……まあ、良しとしますか。はいはい、ただいま二人とも。あのお馬鹿二人が帰ってくるまで話し相手になって貰いましょうか」

02 — M & P

——はしやぎすぎた。

現在は円卓の間の片隅でタブラさんと並び正座中である。全身骨で疲れ知らず——つい先程のおいかけっこで判明した。アンデッド故なのだろう——なこちらはともかく、ぶよぶよとした身体を持つタブラさんはバランスを保つのに苦労している様だ。

垂れ下がる触手でなんとか平行を計るその姿は、正直なところ笑ってしまいそうな程には滑稽と言えた。勿論笑うわけはないのだが。むしろ笑っている暇がないと言えるか。

「——という状況なんですよ。全くお二人共、判ってますか？」

ペしペしと全身の蔓をしならせながら行われるぶにつと萌えさんの問い掛けには、二人して同じ様に頷き答える。仮にここで無駄口を叩いたりあまつさえ首を横に振ろうものならば、待ち受ける未来は真つ暗である。

過去のPVPにおいてぶにつと萌えさん提案の作戦を故意に——出番が無くてつまらないからと——破って突撃した脳筋組武・武・鳥が、ぶにつと萌えさん曰くお話を済ませた後で

は、一言一句従う程の忠実さを見せたと言えば判るだろうか？

それ以降強襲役というほぼ捨て鉢にしか見えない役割を持たされた三人であったが、文句の一つも無かったのだから驚きの効果だと言えるのだろう。尤も詳細について聞いても、頑なに口を閉ざすばかりで判らなかつたのだが。

『モモンガさん。優しいだけでは参謀にはなれません。如何に指示に従って貰えるか、心を込めてお願いする事が大切なんです』

優しい笑み^{エモート}を浮かべてそう言つたぶにと萌えさんの姿が今、再び目の前に居る彼に重なつて見える様であつた。心なしか背筋が伸びてしまふのは致し方無いことだろう。

「たかだか半時間放つておいたぐらいで怒らなくても。自分だけ遊べなかつたからつて拗ねちやつて——」「すみませんタブラさん。よく聞こえませんでした」 うつひえ

!？」

……あーあ、墓穴掘つた。タブラさんも黙つてれば良かったものを。

そんな売られ行く子牛の目をしてはどうしようもありませんつて。というか、人を巻き込もうとしないで下さいよ！ 死なば諸共の精神は今要りませんから！

ほらこつちじゃなくてあつち向いて下さい。しつしつ。

「……そういえばタブラさん、賭け分の取り立てがまだでしたよね？」

「いや、それは明日でも良いとぶにと君もさつき——」「さつき？」 は言つて無かつた

かなくって……」

「私は少しお話が過ぎてしまつたみたいでして、喉が渴いてしまつたんです。生憎と頃合いの蜜は手持ちにありません。ああ、こんな時に高原産の美味しい蜜で喉を潤せれば……」

「要するに今すぐ賭け分の清算をしろと。しかし、私も手持ちには無いことは知つてるよね？」

「＜転移門＞使えますよね？」

「今から取りに行けど？ それでも一番近くのマーカーから一時間は——」

「たかだか一時間じゃありませんか。先程の見事な逃走劇で見せた飛行なら、もっと早くなるんじゃないですか？」

「……量は？」

「そうですね……三食分で結構ですよ。急げば宴にも間に合うかもしれませんね」

「Aye, Sir! 全く回りくどいなあ、もう！ 半時間で済ませてやりますよ、チクショウ！」

タブラさんは悪態を付きながらも見た目とは裏腹の素早い身のこなしで立ち上がり、そのまま円卓の間から転移して出ていった。

……空耳かもしれないが、えらい罵声の聲がナザリックに轟いた様に思える。

思わずハツとして前方に焦点を合わせればにこやかな、それはもうにこやかな表情のぷにっつと萌えさんが立っていた。顔部分の蔓や葉がニコリと笑みの形となっているのだから間違いない。

すわ雷かと身構えたのだが、

「ふう……モモンガさん、少し大切なお話をしましょうか。ああ、もう正座はいいですよ」

「え？ あ、はい」

拍子抜けする程のそよ風に暫し啞然と宙を見つめる事暫し。そんな俺の状態に気が付いたのか、彼は今度こそ苦笑混じりの笑みを溢してこう続けた。

「ふふっ……流石にさっきのは演技ですからね。私もそこまで子供ではありませんし？
まあ、二人して遊んでたのは若干苛つきましたけど……要するに予定通りの流れです」

「ええええー……。変に緊張したこっちの身にもなって下さいよー！」

「あはは、変わりませんねモモンガさんは。ですが話があるのは本当です……むしろ、こちらが本題と言えます」

ぷにっつと萌えさんはゆっくりとかつて自らが座っていた席に腰掛けると、懐かしむように机を撫で彼の言う本題を切り出した。

「——モモンガさん、単刀直入に伺います。貴方はかつての現実世界、此処ではない元の世界に帰りたいですか？」

「いいえ、帰りませんよ私は」

「おや、即答ですね」

「当然ですよ！ 働いて寝るだけの生活よりもよっぽど充実しそうですし。何よりユグドラシルの延長な様な世界です。帰れたとしてもお断りします！」

思わず帰らないとまで言い切ってしまった。

いや、実際にリアルとこの世界を天秤に掛けたなら傾くのは今のこの世界だ。言った通り働いて寝るだけの生活で、唯一の楽しみがユグドラシルという具合。誰が望んでそんな生活に戻りたいと思うのか。

確かに、これから過ごすにあたっての不安も無いとは言いがたい。違和感すら感じないこの身体や、自らの意思で動き出したNPC達。更にはその者達から向けられる忠誠と、それにもし応えられなかったらという懸念。

だがそれは所詮不安でしかなく、不満しか持てない現実となんて比べる事さえ烏滸がましい。

「成る程ーそれなら一安心です。いやー、折角の生ナザリックですからね。少しは堪能してみたいじゃないですか。今すぐ帰る！ なーんて言われなくて助かりました」

「あはは、それこそ私は駄々っ子じゃありませんよ」

どこかおどけた仕草で肩を竦めるぷにと萌えさんは薄く笑い声を上げながら席を立った。

「ふふつ、そうでしたね。モモンガさんは既に大人の階段を一つ登ったんですつけ？」

「お赤飯でも用意させますか？」

「いやいや未遂で——つて、なんで知ってるんですか!？」

「お二人が遊んでいる間にセバスやマーレから聞きましたので」

「うっわー、なんて言われてたのかめちやくちや気になる。そのー……セバス達はなん
と?。」

「直接聞いてみればどうでしょう?。」

「聞けませんよそんなこと!　そもそもマーレに聞きに行ったら犯罪的な絵面過ぎます
し」

「ニツチ過ぎて犬も食わないと思いますけど……あー、拾いそうな奴が何人かは居ま
したね。まあ、モモンガさんがそう易々と卒業するとは思ってませんから。しかも使用履
歴ゼロでその姿アンデッドですしね、大賢者の職を手に入れたら教えてくださいよ?。」

「なっ?!　……そういうぷにと萌えさんだつて、蔓しか無いじゃないですか!。」

「私はやろうと思えば受粉できますし?。」

「……へ？」

「——ま、それはともかく。折角なのでナザリツクを少し見回つてみます。それではモングアさん、また後程」

一瞬白になった頭が正常に戻つた時には、ぷにと萌えさんの姿は扉の向こうへと消えていた。扉の隙間からはゆらゆらと振られた蔓の先が垣間見えている。

「受粉つて……あの、おしべとめしべ、だよなあ……。ここは敢えて触れるべきか？ それとも一切話題に出さない様にするべきか？」

一体何があればあんな平坦な声でこんな事実を伝えられるのだろうか？ 軽く装つて見せた様だが、あからさまに声の調子が普段とは違つて思えたのだ。

消え行く蔓を見送り少し変わってしまった風な友に対し、どう接するべきなのかをこんこんと考え込んでしまう。

そして気が付いた時には案内のメイドから宴が始まる頃だと聞かされた。未だに答えは見つからず、もやもやとした気持ちを抱えながら歩を進めるのであった。



洋風めいた意匠を施された部屋の中央。そこに置かれているのはおよそこの場にそぐわない見た目の事務机とパイプ椅子。胸中には懐かしさが沸き上がると共に、自身なんてことのない癪を思い出しては小さく苦笑する。

「昔から何かを考え込む時には、こういう無機質な机が性に合ったんですよねー……いやはや、それにしても景観とか台無しだし。我ながら酷い内装だ事で」

円卓の間を後にした私は、モモンガさんに伝えた事とは裏腹にかつて愛用していた自室へと真つ直ぐ向かった。道中でセバスへとく伝言^{メッセージ}を掛けた際に『準備が整い次第御迎えに上がります』との事であつた為、判りやすい方が良いだろうと考えたからである。

——少し誤算があつたのはナザリックのNPCの存在。それらの思考を甘く見積もり過ぎた様で、今回はメイド達が当然の様に部屋まで付いてきた。今は一人になりたいからと追い払つたものの、これからは色々苦労しそうだなあとも思う。

軽く内装を確認して簡素なパイプ椅子に腰掛けるとギシツと軋む音が鳴る。

私は別段リアル思考では無かつたので、こういった細かなギミックは付けていなかった筈……これも現実となつた影響かなと一応メモに加えておくとしよう。

視界を閉ざして深く、深く、息を吸う。勿論今の私では口らしき物があるだけで、実際は蔓や葉の表面で呼吸するばかりなのだけだ。更に加えるならば全身から視える訳でして、あくまでもこれは私という人格が持つイメージが、頭を切り替える為に必要な過程と言えよう。

「さてとこれからの事を考えようか。」

彼にはああ言った問い掛けを投げたけども、私とて帰るつもりは更々ない——まあ、帰れないと言った方が正しいのだろうけど。これが今の私達の現状であった。少なくとも私がなんとか知りえた情報の中での話だが。

尤も百年をこちらで過ごした今となつては今更帰つても、という思いもあるわけですが。

そもそも転移した要因が全く判らないときた。キーとなつたのがユグドラシルの終了、という事は確実に間違いないのだろうけど。その他の手掛かりは無いに等しく、その上で今現在に至るまでの間に元の世界へと繋がる道を見付けたか、或いは方法を作つた等という話は伝わっていない。

しかしそれも過去五百年間は、という注釈が付く事を忘れてはいけない。これ以前で

は今ある魔法体系？ や勢力図の頒布等も丸つきり違っていたらしい。

この様な曖昧な表現に成らざるを得ないのは、世に伝わる八欲王伝説が原因……というかこいつらが元凶と言える。大戦の影響で資料も消え去り、叡知を持つ者も消え去り、最後には自らも消え去ったと言われる奴等ではある。

果たしてそれは本当なのか？ 情報の出所が彼の国という点でも怪しいけど……いや、これも一つの視点からしか見えていない訳だから鵜呑みにするとダメですね。

もう少し探れる場所が増えたら良いんでしょうけども……。うむむ。

「——ふう。少し脱線気味かな？」

うん。全てを知ろうと考察する癖は我ながら悪癖ですわね……。まあ、これが性分です。情報アドを得るためには必要な事なのですが。

それはさておき、今後のナザリツクの身の振り方も考えておかないと。余程が来なければ恐らくは大丈夫でしょうが……。過去を紐解けば安泰とも言いがたいのが現実。表に出ないだけで、私達の様な者が幾人かは居るのでしょうか。

それにこの世界での勢力図も、どこか作為めいた感じがするんですよ。でもこれは予感がするだけで根拠も何もありませんが。

うーん……。やはり先を見据えるには必要な情報が足りません。モモンガさんにもお願いしなきゃいけないかなあ。

こうして一先ずの考えを纏めていれば、コンコンと控え目なノック音が静けさを破る。返事をすれば約束通り迎えの者が来ている様だった。

「——失礼致します。ぷにつと萌え様、宴の用意が整いましたので御案内させて頂きま
す」

「ん……了解」

案内に従うままに九階層の廊下を歩けば目に写るはその絢爛さ。ふわふわな赤い絨毯に裝飾が施された燭台、等間隔で顔を見せるシャンデリアと見れば見るほど豪華だなあと思う。

過去には「ちよつと拘りすぎでは？」と意見を述べた事があつたけども。実際に使う身となれば凝り性のギルメンには感謝しないといけません。誰しもみすぼらしい小屋よりかは、豪華なお屋敷に住みたいと思うものですし。

豪華と言えば金持ちの象徴とも言えるお手伝い——所謂執事やメイドが出てくるけども。ここナザリツクでもそれは例外無く、一人一人に専属メイドが侍る事となつていた。

尤も個人の希望欲望に応えていると何時まで経つても完成しない、ということでは計画倒れとなつたのだが。思い浮かべて欲しい、アインズ・ウール・ゴウンの我が強すぎるメン

バー達を。それを×41ともなれば收拾がつかなかった事はお判り頂けるだろう。

その様な事情もあり、今も無駄な足音無く先に行くメイドは一部のメンバーが纏めて創った物となる。

さすがに多すぎて、誰がどの娘をメインに創ったかまでは把握してないけどね。大方は造型、外装、AIで分担したとは話に聞いたけれど。

「そういえば、君の名前は聞いてなかったよね？」

「えっ……？ あ、はい！ ナザリック一般メイドが一人、シクススと申します。よ、宜しければお見知りおきを！」

「シクススか、よろしくー。……一般メイドといえば、あいつが描いてた漫画の元ネタだっけな？」

「まんが、でしょうか？」

「ああ、漫画が判らないか……んー、コマ割りした絵に台詞がメインで描かれる本の事、ですね。ホワイトブリムが一般メイドを主役にした漫画を描いていたから、少し気になってね」

「ホ、ホワイトブリム様が私達をですかっ!？」

余程驚いたのだろうか？

先程までのメイドとは斯くやと言った振る舞いが抜け、彼女は目をキラキラと輝かせ

ていた。興奮気味に尋ねる様は只の年頃の娘にも見える。

「一般メイドの一人を参考に描いていると言つていたから……あー、確か大図書館に何冊かあつたような？」

「そそそれは真でしょうか!? あつ、いえ! 至高の御方であられるぷにつと萌え様の御言葉を疑つている、という訳では決して——」

「……うん。少し落ち着こうか」

可笑しい。普通に話していた筈なのに、何故彼女は跪こうとするのか。日常会話をしていた相手が突如として平伏してくるとか理解不能過ぎます。もしやこれがモモンガさんの言つていた、ナザリックNPC特有の忠誠心というものでしょうか？

あーうん。そんなに涙目になつて心配そうに見詰めないでもいいから。別に怒つてないですし、「黒棺送りにはならないのでしょうか？」とかは要らない心配だからね。

「はいはい、判つたのなら早く元に戻る事。こつちの精神的な意味でも早くお願いします……それよりも、何故黒棺送りになると思つたんでしょうか？ ああ、別に答えたからといって罰しませんし、本当の事をお願いします」

「じ、実は私の創造主たるホワイトブリンム様が頻りに『ぶにつと萌えを怒らせると黒棺で缶詰』と仰られておりました……てつきりそうなきるのかとばかり」

「ああ……成る程」

……あのメイドバカは一体何を吹き込んでるのでしょうか。いやまあ、大方の想像は付きますけど。一時期は鬼軍曹呼ばわりされたものですし。その名を広めたであろう鳥頭レイシは絞りましたけど。

しかしこれは困りました。ある意味で身から出た錆と言えなくもありませんけど、過度に畏怖の念を抱かれているとすれば接し方も考える必要がありますね。ナザリツクの者達には主に諜報面で期待している部分もある訳で、正直言つてこの状態では宜しくない。

とはいったものの、イメージというものは早々簡単に覆せるものではない。赤色は熱く青色は寒いと思うように、NPCからすれば私は鬼軍曹なのでしょう。けれど、手がない訳でもない。

「まあ、とりあえず事情は判りました。別段怒つてないからシクسسも気にしないで良からね？」後、他にもモモンガさんとタブラさんのイメージを教えて貰えますか？」要するに他のメンバーにぶん投げれば良い。適材適所という奴です。コミュニケーションを取るならば印象が良く、接しやすい者が一番な訳ですし。

タブラさんとはもかく、ギルド長で率先して皆の潤滑油となってくれたモモンガさんならばNPCからのウケも良い筈だろう。

「はい、まずはタブラ・スマラグデйна様ですが——で、——。そしてモモンガ

様は——」

▽△▽△▽△▽△▽△

「ああ……モモンガさんも、今から向かうところですか？」

メイドに促されるままに廊下を歩く、そんな案内の道中で件の彼と鉢合わせた。ぼんやりと歩いていたらせいにかあまり周囲に目を向けていなかったで、声を掛けられてから初めて気付く始末である。

改めて確認すればヴァイン・デス特有の形成された蔓が、心なしかふるりと震えた様に見えた。

しかし、うん。どうしようか。

こうもバツタリと鉢合わせするとは思ってもみなかった。つまり今俺の頭は真っ白で、折角考えていた当たり障りのない言葉（二十通り）が全て無駄になってしまった。

「ええ、そんなところです。……それよりも、ぶにと萌えさん」

「改まつてどうかしましたか？モモンガさん」

「ぶにつと萌えさんにお似合いの女性植物、きつと見付かりますよー！」

だから、ということでもないんだらうけど。思わずうっかりと発言してしまったのは不可抗力だったと言えるだろう。

それにほろりと零れた発言ではあつたが肩（？）に手を添え、良い笑顔とサムズアツプを加えられたおかげで印象は悪く無い筈である。

「——つ、ふつ、くくつ、モモン、ガさん？ 私を笑い死に、ふふつ、させるつもりで、っ」

「え、っ!? なんでそんな大笑いを……?」

「ぶつ、ふは。っこれ、が智謀の、王つて——」

ぶにつと萌えさんは何故かお腹を押さえる様にして笑い始めた。

俺、何も変な事は言つてない……よな? もしかして種族特性で笑いのツボも変わったのか? 仮にそうだとすれば今までと同じ様に話すのは難しくなるな。

色々と相談したい事も多いし、折角だからそこを詳しく聞いてみようか?

「すみませんが今後の為に、笑いのツボとか何が可笑しいのかを教えてくださいませんか?」

「——つ、——つ、も……やめ、っ」

終いには床をたしたしと叩きながらその場に蹲るぶにつと萌えさんが居た。案内役を務めていたメイドの二人が慌てて駆け寄るも、どうすればいいのか判らず右往左往す

るばかりである。

「えー……」

よく判らない内によく判らない事態となっていた。

仕方がないのでふにっと萌えさんの笑いが収まるのを待つて——かれこれ十分間は笑いの波が引かなかつた様だが——詳細を尋ねる事にした。

その間悶え苦しむふにっと萌えさんと、様子に気が付いて駆け寄るメイド達が焦る場面が続き、軽い混乱の波が九階層に拡がった事は言うまでもない。

ちなみに返答はというと、

「——モモンガさん。それ割と本気で聞いてます？ あーうん、もう良いです良いです。これ以上は私の腹筋が壊されそうですしー？ それよりも私のせいで待たせちゃいましたから、さっさと向かいましょうか」

何故だか呆れられた視線を向けられる羽目となった。

やっぱりそつとしておいた方が良かったのだろうか？ いやそれなら笑うよりも先に叱責が飛んで来そうだよなあ……だとすれば何か見当違いでもしたのか？ うーん、判らん。

こういう時の機微に聡いのは主にやまいこ死天朱雀さんや教授だったよなあ。こんな事ならコツとか聞いておけばよかった。やっぱり指導する立場になると自然と身に付いてい

くのだろうか？

指導といえバナザリックに属する者達の事もある。理由は結局判らないが、狂信的な忠誠心を持った彼女らを統率し率いていかなければならない。

……軍属でも無し、部下を持った経験すら無い平リーマンの俺である。考えれば考えるだけ頭が……いや、無い筈の胃が痛くなつてくるな。

「ぶにつと萌えさん」

「？ はい、なんでしようモモンガさん」

「アンデッドにも効く胃薬とかありませんかねー……」

「あー……うん。がんばー」

「ええー……めちやくちや他人事ですけど、そうも言つてられませんからねー」

「さて、どーでしょうかねえ……ところで話は変わりますが、セバス達は一体何処で開催するつもりなんでしょうか？」

「ああ、確かに私達の場合だと円卓の間で済ませちゃいますからねえ。皆さん覚えてないかもしれませんが、九階層にはパーティールームなる部屋がありまして——」

左横を歩くぶにつと萌えさんはどうやら会場となる部屋に当てがない様だった。まあ、九階層の娯楽室は制作者以外が知らない様なものばかりなので、仕方がないといえるが。

按摩、フィットネス、バー等の実用的なものから釣り堀、レトロゲーム、底無しバンジー等の個人趣味全開の部屋、更には重力室、地中、工事現場等の用途不明なものまで盛り沢山なのだから。それをギルド長だからといって全て無理矢理体験させられたのは、良くも悪くもいい思い出である。

そして今回の目的地はパーティールーム。呼んで字のごとくパーティー会場になるように設計された部屋である。尤もユグドラシルでは皆が集う関係上、円卓の間に役目を奪われていたと言える悲運な部屋だろう。

ちなみに制作者はナザリツクのお祭り男こと——自称だが——るし★ふぁーである。
 ……

あれ？

物凄く嫌な予感がするんだけど。大丈夫……だよな？

「モモンガ様、ぶにつと萌え様。案内役の私共はこれにて失礼させて頂きます。改めまして御帰りなさいませぶにつと萌え様。——どうぞごゆるりと御寛ぎ下さいませ」

俺の内心をよそにパーティールームへとついに案内され、恐る恐る周囲の様子を探るものの見た限りでは極々普通に見えた。幾つかの丸テーブルには料理が盛り付けられ、シャンパングラスの盆を持ったメイドが待機している。他にも娯楽室専門のNPCまで集っている様だ。

部屋の中にはダーツやビリヤードが各所に備え付けられており、他より一段上がったステージにはカラオケ設備まである。

「——モモンガ様、ふにつと萌え様が到着なされました。どうぞ盛大な拍手で御迎え致します」

そしてそのステージ上には既にアルベドがスタンバっており、手に持つマイクで口上を述べている。

途端に広がる強烈な拍手喝采に、どうしまししようと隣を歩くふにつと萌えさんを窺えばその姿がどうも見えない。ぐるりと首を回して探してみれば素知らぬ顔をして料理に手をつけている彼が目に入った。

——いやいやいや、これ気にならないんですか!?! ってか、うつわあ……蔓の先から吸収されてる……掃除機っぽいなあ。

そんな俺の心の叫びが聞こえたのかぶにつと萌えさんはこちらに視線を向けると、恐らく今日会ってから一番の笑顔でこう告げたのだ。

「皆、快く迎えてくれてありがとう。モモンガさんから一言貰い、始まりの挨拶と致しましょうか!」

「え、っ、!?!」

突然の無茶ぶりであった。

ぶにつと萌えさんの言葉にやおら高まる会場の熱気。期待溢れるNPC達とはある種別の意味を感じるアルベドからの視線。高みの見物とばかりのぶにつと萌えさん元と一心不乱にダーツに興じるタブラさん……というか帰ってたんですか!?

もうなんか色々混沌と化して昂る気持ちがあンデッド特有の沈静化で収まり、いつそのこと思うままにやろうと開き直る事とした。

軽く片手を上げればざわついていた会場が沈黙で満たさ——いや、タブラさんはいつまでダーツやつてるんですか!?

仕方がなくヒュッ、トトトン、ヒュッ、トトトンと刻む音のみとなった頃に声を上げた。

「ご紹介に預かったモモンガだ。本来、私は迎える側である為に目立つ真似はしたくはなかったのだが……我が友の頼みとあらば致し方あるまい。——それでは皆、我が友ぶにつと萌えとタブラ・スマラグデイナの帰還を祝し、ここにアインズ・ウール・ゴウン再始動を宣言する!」

「アインズ・ウール・ゴウン万歳! 至高の御方、万歳!」

この万歳合唱は暫く止むことがなく、我に返った俺が目にしたのは呆れ顔のぶにつと萌えさんとハットトリックを決めているタブラさんの姿であった。

××××××××
おなみに余談ではあるが、後日アルベドから「お探しの薬が見当たらず……申し訳ございません。しかし胃薬を御所望とは、私ども僕が何か至高の御方の負担となつてゐるという事でしょうか!? もし宜しければ理由を仰られて下さいませ。それが御無理との事でしたら、私を負担の捌け口に、是非……！」との報告と共に迫られる羽目となつた。恐らくメイド達から会話が漏れたのだろうが、これからはNPCが控えている際は話の内容にも気を向けなければならぬわけだ。色々と頭が痛い。

更には丁度その場に居合わせた一人から冷やかされる事にもなつて頭痛も倍増だ。尤も「勿論、御創造主様もぶにつと萌え様も御好きな様に……」と息も荒げに加えられた発言には、皆して口を閉ざす他なかつたが。

なんとかアルベドを下が^{撃退}らせてから、その日はタバラさんを問い詰める事となつたのは言うまでもない。

03 — T & P

「えっ、ルベドを動かすんですか!？」

ただっ広い部屋に木霊したのは我らがギルド長の声。それにしても骨しか無い癖にどこから声とか出してんでしようね。全身を支える筋肉も無いのに崩れもしない。

んまあ、今更こういう事にツツコむのは野暮つてもものだけど。

「そんなに驚く事ですか？」

「そんなに驚く事ですよ！ よりにもよってルベドって、なんてまたタイムリーな……」
頭を抱えて上半身を揺らすモモンガさん。相も変わらずリアクションの大きい人ですなー。

それよりも、ルベドに会いに行きたいと言った途端にこの反応。そんなに拒否感出されちゃうと、産みの親としては悲しいなあ……なーんて。

「はあー……、タブラさん色々と言葉が足りていませんよ。悪戯にモモンガさんをかうのは控えて下さい。後、つまみ食いもやめなさい」

見かねた様子でふにつと君が咎めてくるけど、ちよつとばかり過保護じゃないかねえ？ いやいや別にからかい足りないとかじゃないけど、あまりにもモモンガさんの慌てっぷりが美味しくて。

ほんとと精神の揺らぎが無いアンデッドとは思えないよ。流星は我らがギルド長。

「えー……別にそういう訳じゃないんだけどなあ」

「そう言いながら口が動いてますけど？」

マジか!? と思つて確認に腕を動かした所で腹黒野郎ふにつと君の思惑に気が付いた。咄嗟に動きを止めるも時既に遅し。嫌な笑みを湛えながらこちらを見据える彼に、駄目元で曖昧な微笑を浮かべてみる。にぱー。

「気持ち悪いのでその顔をやめなさい、今すぐ」

「酷いつ!? ……えーん、モモンガさんふにつと君が意地悪するよー」

「……………この身体になつて、ある程度感性が変わつた事は自覚しました。けどこれは、普通にキモイですね。最早新手の精神攻撃ブッですよタブラさん」

「チクシヨウ！ 誰も味方が居ないじゃんか！ こうなつたらもう勝手に起動してきてやる！ バーカー！」

戦略的、撤退！ 瞬く内に周囲の景色が変わる。

ふう、なんとか追及される前に逃げられた。時間の先伸ばしだつて？ アーアーキコ

エナイー。

「モモンガさんの部屋から飛んだ先は宝物殿。移動されてないならばこの先にある筈だしねえ。」

地味に異紛いである金貨の山を飛び越え、毒やら何やらを越えて扉前に到着。

……しつかし、こうして見るとぼつかりと闇が口を開けている様にしか見えん。誰だよこんなのを造った奴は、まるで扉に見えないんですけど。いや、頼んだのは私だけだし。

“Ascendit a terra in coelum, iterumque descendit in terram, et recipit vim superiorum et inferiorum.”

「かくて汝、全世界の栄光を我がものとし、暗きものは全て汝より離れ去るだろう——とここまでが正規のパスで、つて綺麗に出来てるなあ……」

黒に浮かび上がるのは金の文字。それは闇夜を躍る様にして一文字ずつが丁寧に綴られていき、思わず感嘆の声を漏らす程には美しい光景であった。

“Sic habebis gloriam totius mundi. Id eo fugiet a te omnis obscuritas.”

「火から土を、粗雑なるものから精妙なるものを優しく、そして巧妙に分離せよ。これは

あらゆる力の中でも最強である」

本来一節で終わる筈の扉のパスコードは新たな言葉に認証を続け、前の一節が溶ける様にして消え去ると新たな文字が刻まれていく。

“Haec est totius fortitudinis fortitudo fortis, quia vincet omnem rem subtili-
em, omnemque solidam penetrabit.”
「故に全ての精妙なるものに打ち勝ち、全ての個体へと浸透する。其は定められた」
全てを言い終え一息吐くと、黒一色であった扉に変化が表れた。

これがユグドラシルであったならば、気の抜けるファンファーレと共に『あなたは隠された秘密を暴き、その洞察力を見事に発揮した！ 経験点に四点を加える』というお知らせログが流れ出る事だろう。

しかし、ここはユグドラシルではない。特徴的な効果音が鳴ることも無く、闇を体現していた扉が穢れなき白に染まる頃。その光によって照らし出されたシルエツトが徐々に姿を露にしていく。

——つて、あれ？ なんかやけに人型に見えるような？

そんな些細な疑問が浮かんだ時、シルエツトの人物が大きく礼をとって光から一步進み出た。

「——こうれば、これは！ 我らが至高の一柱であられるタブラ・スマラグディナ様、ようこそ私が管理する宝物殿へいらっしやいましたっ！」

つるんとしたデッサン人形を思わせる形状に古代の埴輪を模された顔。昨今、一部のマニアが熱狂したとも言われたネオナチの軍服を模した物を着こなすその姿。紛れもなくパンドラズ・アクターがそこに居た。

と少しばかり驚いた風を装ったものの、そもそも居るだろうなあーとは思っていたからねえ。いやまあ、あのタイミングで出てくるとは思わなかったけどさ。

「よーす、パンドラズ・アクター。早速で悪いけどルベドのカプセルは何処行つたか判る？ 呼び出した筈が出てこないから困つててねえ」

「えええええ、勿論存じております。御探しの物は霊廟に移動されました」

「ほーう。て事はモモンガさん辺りが動かしただかね？」

「Geneau! 実は昨日、幾つかのアイテムを受け取りに我が創造主様がいらっしやい

まして——」

あちやー。先を越されていたという事でしたか。流星は我らがギルド長、さっきの慌てっぷりは演技だと——いや、あれは素ですわ。

まあ、ともかく。さっさと行って出してやろうっと。

今だからこそ判る事もあるだろうし。

……で、何時までも語ってるのさこの埴輪顔は。モモンガさんに会えた事が余程嬉しかったのだろうか？　ここまでなるものかねえ？

しつかし眺めると、細かい部分とかモモンガさん似だよなあ。あ、ほら今の腕を広げる仕草とかよくやる奴。NPCが創造主に似通うのは予想通りですなあ。さすぷに。

それでも例外はあると思うけどね。ウチの娘アルベドとかほんと特に。百年越しで初めて動く姿を見た時とか、なんか柄にもなく感動したんだけどさ。眼が、ね。獲物を狙う眼だった。あれは狩る者の眼光だわ。

この前ちよいと怒られたし、少し控えめにしなさいと注意したのが何時まで持つことやら……。

「——で我が主君は移動が出来る様にと、至高なる御方々のみに許された指輪までも授けて下さりまして、」

「あーはいはい、ストップストップ。続きはまた今度聞いてあげるから。今はこつちを優先して欲しいなーって」

まだまだ止まりそうになかった親自慢を止め、いつの間にか黒に戻った扉を開いてその先へ。

管 理 者バンドラス・アクターとは似付かない落ち着いた雰囲気のある部屋を抜ければ、世界級アイテム貯蔵庫でもある霊廟へ入る事が出来る。

尤も今のまま入ればYOU DIEDとなるのは間違いないけど。このギミックを
 考案したの誰だろうなあー……ガチ過ぎるから。

「申し訳ございません、タブラ・スマラグディナ様。あろうことか御身がいらつしやると
 いうに、私情を優先してしまおうとは……なんたる、失・態！」

「んーそいじゃ、後でちよこつとだけ協力してくれたら許そう」

「——！　なんと寛大なる処置……っ、私が助力出来る事でしたらあ、なん・なり・と、
 御申し付け下さい！」

「うんうん、とりあえず今はこれ持つててね」

「Alles nur nach Gottes Willen」

いやはや、パンドラズ・アクターと話してれば空腹知らずかもなあ。後でモモンガさ
 んと引つ付かせて、どうなるか味見しないと……くっくっふっふっ。

邪な考えを浮かべつつもパンドラズ・アクターに指輪を預け、別段気負う事もなく霊
 廟を進む。比較的狭い道の両脇にそびえるのは計四十の化身^{アヴァターラ}身達だ。

それぞれが歪だつたり、やけに美化されていたりと姿形にばらつきのあるゴレム
 達。ギルメン一人一人が自らの分身を手掛けた結果である。得手不得手があつても多
 少は仕方がないと思う。

むしろ、一部の獨創性溢れる前時代的な彫像にはお金を払つても良いかもしれない。

もちろん、そんな物好きが居るならばの体で。何百年か経てば評価されるかもだし？

それほど長くもない通り道は過去を懐かしむ間に過ぎ去り、たどり着いた靈廟の最奥には最後の化身としてモモンガさんの像が待ち構えていた。久しぶりに見ても厭つゝい。

これだけは外装班総出で取り掛かって造ったよなあ。モモンガさんの腕前が微妙に普通過ぎたのが原因で、笑うにも誉めるにもアレで、格好も付かなかつたから取り上げたんだっけ？

手が混んでいる分、相応の出来と言えるこのゴーレムはまさに魔王な彫像であつた。「非公式ボスらしく魔王っぽくやろうぜ」とは誰の発言だつたっけ？

有言実行。その通りに造り出されたゴーレムは、常に闇のオーラを纏つてよく判らないポーズを取つている。意見を出した奴によれば、『いてつくはどう』との事。一部はそれで理解出来たらしい。

ちなみにそこその出来であつた為、ナザリツクの表層に飾ろうという意見も出たとか。まあ、それはご本人様によって阻止されたんだけどねえ。

後にも先にもギルド長権限を使ったのは、その件が最初で最後だつたなあ。

「ほんと懐かしい……確かモモンガさん、こつそりこの像と同じポーズをとつてたりしたっけ。あれは良いネタになつたよなあ〜」

かつてのヒトであつた際の記憶。その中でも特別盛り上がった時を思い出して一人

ほくそ笑む。こつそりやった悪戯も随分あったものだど記憶を振り替える度に笑う。

そして今、この行動もその内の一つとして加えよう。

密かに実行へと移せなかった事が残念でならないけども。

「じゃ、感動のご対面といきますかー」

モモンガ像を避けて奥に進めば、美術品の様に展示された幾つかの世界級アイテムが安置されているのを見ることが出来る。

そして今はそれらを覆い隠す様にして、巨大なカプセル——所謂冷凍PODが鎮座している。表面の大部分を占めるガラスからでは不思議と中を覗く事も出来ず、薄い青混じりのそれは松明の明かりを受けてこちらの姿を写していた。

「正規手順だと半時間は起動句を唱えるんだっけ？ あの時は半自動で対応してたけどさ、今はそんな事する気も無いし——Pat e f a c i o」

本来踏むべきプロセスを省いた創造者権限を唱えれば、夥しい冷気が水蒸気として開いた隙間から流れ出した。もうもうとした水滴が立ち消え、次いでガコンと重厚な音が部屋に響く。

持ち上げられたガラスは上方で固定され、殻が割れる様に中身が姿を現した。外気に曝された影響か、眠っていた者がゆっくりとその瞼を開く。

「おはようルベド」

「、」
起きて間もない為かその口から零れたのは言葉にならない音であった。

まあ、現実となつたんだし今までは勝手が違うよなあ。実際に冷凍睡眠されてたら
ぎこちないのも多少は仕方ないか。普通なら身体とか衰えちゃうもんねえ。

今も何かを言葉にしようとかパクパク口を動かすルベドを見て——ここで一度、私の意識が暗闇に落ちた。

▽△▽△▽△▽△▽△

「バーカ！」

小学生並みの捨て台詞を残し、醜悪な様相の蛸擬きが姿を消した。言葉振りから察するに停止状態のルベドを起動しに向かったのだらうと思う。

それを見届け、モモンガさんとどちらともなく溜め息を吐く。ふう……キモかった。どうやったらず目元だけを肥大させられるのだらう？ ギャグ補正という奴でしようか？

「いつかは言い出すと思っていましたけど……まさか、ここまで早いとは意外でしたね」
 疲れた様に肘掛け椅子の背もたれへと身体を預けたモモンガさんは、少しばかりの驚きを示していた。

「私はむしろ遅かったと思いましたがよ？」 ナザリツク 此処に帰って初日はともかく、次の日には動くと考えてましたからねー」

「通りで保管場所を変える様に急かしていたんですか。しつかし呼び出すだけでも手順が複雑過ぎるよなあ……パスを知ってるシズが居なければどうなった事やら」

ま、伊達に丸一世紀も同行してませんから。旅をする間に二人して、もしもナザリツクがこちらに来たら〜という会話を繰り広げましたし。

まさか『自分で創ったNPCと過ごしたい』なんて言うとは思いませんでしたけど。タブラさんって割りと作り終えたら満足するタイプでしたから。

んーまあ、彼も思う所があったという事なのでしょう。

「それでも今の段階でなら対策は十分打てますからね。仮に——いや、もう向かった筈でしょうから時間の問題か。ルベドが起動したとしても、既に一部には避難する様言い含めてありますし。被害は最小限に抑えられそうです」

「さすがぶにつと萌えさん、伝達含めて行動が早いですね。いつの間にアルベドと打ち合わせを？」

「……あー、この前の夜アルベドが訪ねて来まして。その時ですかね……」
「……ああ、はい。控え目でもそのレベルなんですけどね……」

日中は控えて夜にという事らしかった。違う、私達が言う控えてとは意味合いが違う。何処から持ち出したのか、腕にYES枕まで持ってやがりましたし。お手製だそうでした。何故か両面ともYESでしたからね、知っていました。

——なんとかして気を逸らす為にモモンガさんをだしにした事は秘密です。モモンガさんなら上手くやれる、がんば。

「今夜辺りお気をつけて」

「? 今何か言いました?」

「いえいえ、なんでもありませんよー。話は戻りますけどモモンガさんは特に相性が悪いんです、注意してくださいね?」

「二応消えない耐性は揃えますけど……此処が現実となつた今、何が起こるか判りませんよね。心得ておきます」

改めての注意喚起と万が一に備えてのアレがアイテムボックス内にある事を再確認。ほつと一息吐いた時、慌てた足音と共に扉が荒々しく開かれた。

何事かと扉を見やれば落ち着いた雰囲気とはかけ離れた様子のアルベドと、その後ろから慌ただしく——表情ではなく動作の方だが——付いてきたパンドラズ・アクターが

目に入った。動作だけでうるさく見えるのは一種の才能かもしれません。

途端に隣から聞こえてきた悶える様な声はシャットアウト。只事では無い様子に弛めた思考を切り替え、糸を張る。本当に、休まる暇もありません。

「御歓談中、不躰な訪問を御許し——」

「構わない。火急な要件だよな? 聞こうか」

やはり優秀とはいってもこの一点が邪魔くさいと感じる。どうか意識の水準を下げられたら……と今はそれどころじゃないか。

「ハッ! 実は先程、タブラ・スマラグデйна様がルベドを起動なされたのですが、」

まだ予想の範囲内。問題は何処に連れていったのかの一点。第六階層なら楽になるのです。

「どうやらナザリックの外へと出て行かれた様でして

「は?」

……………

……え? 外? ナザリックじゃ、ない!?

「タブラ・スマラグデйна様が霊廟へ向かわれた後。少しして御身を抱えたルベドが現れ、私から指輪を掠め取り転移をしたのです。ああつ、その時に私が御止め出来れば——」

身振り手振りを踏まえて行われるパンドラズ・アクターの言。しかし言葉全てが抜け落ちた様に素通りしていた。あまりにも予想外。想定外の斜め上をいく事態に一瞬思考が白く染まってしまう。

いや、外といつてもそれほど遠くではない筈。そうなると、

「アルベド、至急探索班を結成し追跡する様手配を。私からも集眼の屍を幾つか生み出そう。アウラ配下の魔獣にはナザリック周囲を探る様に追加で指示を出してくれ。パンドラズ・アクター、お前は万が一に備えて第一階層の防衛に当たれ。マーレにも第一階層を当たらせる、シャルティアとアルベドは相性が良くないからな——と、こんなものでどうでしょう、ぷにっつと萌えさん？」

考えを纏め上げていけば、横から既に指示が出されていた。アルベド達に聞こえない様、こっそり小さく呟いた確認の言葉には苦笑を浮かべるしかないが。

——それでも流石です、モモンガさん。やはり貴方には皆を纏める、上に立つ者の才能がある。

我がギルド長に内心で賛辞を贈ると共に、心持ち不安げな様子の彼を安心させるべく口を開いた。

「それに追加でもう一つ。手の空いた階層守護者とセバスは、用意していたアレを持って表層に集まって欲しい。私達も出るから」

至高の御方がどうと言われた気もしたけど、軽く聞き流してモモンガさんに任せてく伝言メッセージを繋ぐ。

一回目は……ダメでしたか。早々に諦め、次を掛ければ即座に糸が繋がった。

「モモンガさん、リーダーの用意をお願いします」

「《っ、それがあればタブラさんの位置は判りますね。了解です……しかしぷにと萌えさん、これ口を動かさないのが難しいんですけど》」

「《慣れですよ、慣れ。タブラさんには繋がらないので非常時かもですね。ちよつと急ぎましょう》」

元より表情を作る私みたいな種族は、この点に関しては最初から熟練レベルである。なので慣れとか以前の問題ではあるけれど、必死に口を閉じて頑張るモモンガさんが面白いから黙っておきましょうか。

さてとお遊びはこれまでにして、件の問題を片付けないと。約束を破る悪い奴の事なんて、この際犬にでも食わせておきましょう。

厄介なのはやはりルベドの存在。仮に今までユグドラナルと同じ手が通用するとしても、まずはあの暴れ馬を宥めなければなりませんし。

元より魔法職のモモンガさんとはかく、シャルティアを迂闊に出せないのが厳しいか。アルベド、コキュートス、セバスで止められなければ……最悪破壊も検討に入れましょう。

——何故外に出たのかは判りませんがこの際は、一度みっちりお話する必要がある
かもしれませんか。タブラさん？